様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１０５２

研究課題名（和文）民俗芸能の危機と教育の可能性：岩手県陸中海岸の伝統文化の再生をめざして

研究課題名（英文）The Crisis of Folk Performing Arts and the Possibility of Its Education: with the Aim of Reviving the Traditional Culture in the Coastal Area of Iwate

研究代表者
川口　明子（Kawaguchi, Akiko）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：５０４６６５１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2011東日本大震災後の岩手県における地域と学校とが連携した民俗芸能の後継者育成の過程をドキュメンテーションし、伝統文化再生の教育プログラムの提示を目指したものである。具体的には、①民俗芸能を取り巻く危機的現状の調査（フィールドワークや大学生対象のアンケート等）とともに、②事例研究として陸中海岸の鵜鳥神楽（普代村）と中野七頭舞（岩泉町）を取り上げ、伝承過程を「動態保存」とコンテクストの観点から記述・分析した。③平成26年度には、岩手県の小・中学校を対象とする郷土芸能教育実施状況アンケート調査を実施し、平成15年のデータと比較分析して伝統文化の継承と教育の在り方について検証した。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to present an educational program to revive the traditional culture in Iwate after the Northeast Japan Earthquake on March 11, 2011, by documenting the process of developing successors of folk performing arts supported by the cooperation between schools and the local areas.The concrete approaches taken were (1) to research the critical conditions related to folk performing arts,(2) to analyze their transmitting processes from the point of view of dynamic preservation and socio-cultural context, taking Unotori Kagura at Fudai Village and Nakano Nanazu-mai at Iwaizumi  Town in Rikuchu Coast as case studies, and (3) to verify the questionnaire results of folk preforming arts education targeted at elementary and junior high schools in Iwate conducted in 2014.The importance of the traditional culture and its education was recognized.

研究分野：音楽教育　民族音楽学

キーワード：民俗芸能　岩手　教育　東日本大震災

１．研究開始当初の背景

（１）民俗芸能を学校教育へ取り入れようとする教育政策は、1960 年代に萌芽を見せ、1980 年代から推進されてきたが、まだまだ多くの問題が山積している。民俗芸能団体（保存会等）の伝承者や地域との連携、学校での鑑賞教室や講師の派遣、芸能の歴史や文化についての教材や教育プログラムの開発は、今なお開拓すべき現代的な課題である。

（２）学習指導要領(2008)においては、今までに増して「我が国の伝統文化」の重要性が強調され、小学校音楽科でも祭をはじめとする民俗芸能（郷土芸能）の教材化も強化されている。中学・高校の音楽科では「音楽文化の理解」が新たに目標に掲げられ、文化的・歴史的背景（コンテクスト）を踏まえた伝統音楽の指導の一層の充実がうたわれている。

　こうした指針は、民族音楽学や文化人類学の諸理論、例えば「身体技法」を重視した無形文化財の「動態保存」やコンテクスト論（徳丸吉彦他編 2007『事典　世界音楽の本』、山田陽一編 2008『音楽する身体』など）等をベースとしているが、これらの学問成果の学校教育への寄与は現状では不十分であり、さらなる実践的援用が望まれる。以上を踏まえ、本研究では「民俗芸能の宝庫」と言われる岩手県の事例を対象に、理論と実践をリンクさせた研究を行う。

（３）岩手県では、神楽やさんさ踊り、虎舞、鹿踊、七頭舞など、東北地方を代表する豊かな芸能が、暮らしとともに生きた形で継承されてきた。また、学校での郷土芸能の活動も盛んで、運動会や文化祭等で伝承活動として取り組まれてきた。しかし、2011.3.11 東日本大震災によって陸中沿岸部のコミュニティが根こそぎ崩壊し、民俗芸能の活動や伝承が危機にさらされている。特に、後継者育成の問題は、震災前から存在してはいたが、より切実となった。このため、こうした現状を調査し、伝統文化再生のための教育プログラム例を提示することが緊急の課題である。

２．研究の目的

本研究は、震災後の岩手県における地域と学校とが連携した民俗芸能の後継者育成の過程をドキュメンテーションし、伝統文化再生の教育プログラムを提示することを目的とする。具体的には、①民俗芸能を取り巻く危機的現状の調査、②陸中海岸の民俗芸能の事例研究：鵜鳥神楽（普代村）と中野七頭舞（岩泉町）、③教材の作成と民俗芸能の鑑賞会およびシンポジウムの開催を行い、それらを総括して、伝統文化の継承と教育の在り方について検証する。

３．研究の方法

（１）東日本大震災後の岩手県の民俗芸能の現状の情報収集と基礎調査を、メンバー全員が、フィールドワークや岩手県内の大学生への聴き取り、アンケート等により持続的に行い、国内外の学会等で発表した。

（２）事例研究として、陸中沿岸を巡業する「廻り神楽」の鵜鳥神楽（普代村）と、伝承を県内外に広げる活動をしてきた中野七頭舞（岩泉町）を取り上げ、地域や学校と連携した民俗芸能の後継者育成に注目して現状を調査し、「動態保存」とコンテクストの観点からドキュメンテーションを行った。

（３）陸中海岸の民俗芸能を事例としたフォーラムを開催し、伝統文化の継承と場の再生の問題について討論した。

（４）平成 26 年度に岩手県の国公立小・中学校を対象とする郷土芸能教育実施状況アンケート調査を実施し、今後の岩手県の教育に寄与するために、その報告書を県内の教育機関等へ配布した。

４．研究成果

本研究では、震災後の岩手県における民俗芸能の状況変化により、若干計画を変更した部分もあったが、民俗芸能の危機に際しての教育の可能性を事例研究やアンケート調査等により具体的に提示し、その研究成果を教育現場等に還元した点が、研究の意義として認められる。以下に具体的に成果を報告する。

（１）東日本大震災後の民俗芸能の現状について研究メンバー全員が持続的に関係者からの聞き取り調査やフィールドワークを行い、情報を収集・共有し、その成果を国内外の学会等で発表した。また、研究代表者は大学生を対象とするアンケート「民俗芸能自分史」を継続的に実施した。大学生自らの震災後の芸能の在り方への意識喚起にもつながり、伝統文化の継承へ向けての意識も高められた。

（２）陸中海岸の民俗芸能の主事例として鵜鳥神楽（普代村）を取り上げ、研究メンバー全員が研究に携わった。鵜鳥神楽は、黒森神楽と並び沿岸部の広域を巡る「廻り神楽」であるが、震災で巡業先の「神楽宿」の多くが流失し、危機を迎えていた。そこで新しい試みとして、小学校を民俗芸能の「場」とする「子ども神楽宿」が連携研究者・橋本裕之氏により発案され、保存会や普代小学校との連携により平成 24・25 年度に試行することができた。これは、小学生が「神楽宿」を主催し、宿の運営から神楽のコンテクストまで総合的に学ぶ教育プログラムであり、学校・地域・保存会・研究者チームの連携による民俗芸能の「場」の再生・創出のモデルともなり得る事例として大きな意義が認められ、その後も継続されている。なお、鵜鳥神楽の「子

ども神楽宿」のドキュメンテーションを映像専門家の撮影によりDVD記録教材として作成し、今後の持続的活動のために、学校や保存会等へフィールドバックした。

（３）中野七頭舞（岩泉町）の事例研究については、被災後の保存会や学校での活動についてインタビューを中心に調査を行った。中野七頭舞は、保存会並びに地元の小・中・高校での伝承のみならず、東京等の県外にも活動の場を広げてきた芸能である。震災後は学校における伝承活動にも広がりが見られ、例えば岩泉高校の高校生が国内外での公演で活躍する等、グローカルな交流が新たに展開された。

（４）2014年3月22日に、鵜鳥神楽保存会を招聘し、フォーラム「社会実験としての神楽宿」（日本音楽学会東日本支部第21回定例研究会、岩手大学桐丘荘）を開催した。研究分担者・木村直弘氏がコーディネーターとなり、連携研究者・橋本裕之氏と研究協力者・中川真氏が現状報告を行い、畳敷きの会場で「神楽宿」に近い形での神楽公演が行われた。「芸能の実践の場」の創出の重要性や研究者として「被災地に学ぶ」意義が再認識された成果は大きい。

（５）平成26年度に最終年度のまとめとして、研究代表者が、岩手県の国公立小・中学校を対象とする郷土芸能教育実施状況アンケート調査を実施した。既に（一社）岩手県文化財愛護協会により平成10、13、15年の3回にわたり実施された同様のアンケートの追跡調査として位置づけ、震災後の現状を平成15年のデータと比較分析した。その結果、学校における郷土芸能教育の実施率は、中学では以前より減少して35%だったが、小学校では大きな変化はなく63%であった。一方、学校と地域のいずれかまたはその両方で郷土芸能の活動に携わっている子どものいる学校の割合は、小学校で約8割、中学校で約７割と共に高いことが新たに明らかとなった。さらに、被災地の学校からは、運動会や文化祭等での芸能の発表が地域コミュニティにとって「復興に向けた喜びやシンボル」となっている報告も寄せられた。これらの事例を元に、アンケートの報告書では、地域文化の再生や復興へ向けてのアプローチの基礎となりうる資料を作成し、伝統文化の継承と教育の在り方について検証した。なお、当初の計画では、教材「岩手の民俗芸能とくらし」の作成を予定していたが、アンケートの報告書に教材的な資料を掲載する形でまとめとした。この報告書は、岩手県の教育関係機関や学校等へ配布し、研究成果を還元した。

＜引用文献＞

①徳丸　吉彦　他（編）『事典　世界音楽の本』岩波書店、2007

②山田　陽一（編）『音楽する身体』昭和堂、2008

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①木村　直弘、平泉諸寺祭礼曼荼羅のサウンドスケープ―哭きまつりと印地打が根ざすもの、岩手大学教育学部研究年報、査読有、vol.73、2014、pp.75-96

②見市　建(編)、シンポジウム：東日本大震災と岩手県沿岸の民俗芸能―地域を支えるチカラ、総合政策、査読有、Vol.15-1、2013、pp.91-109

③ Miichi,Ken, Berpikir local keanekaragaman Jepang yang ditemukan kembali melalui pertukaran budaya（文化交流を通して日本の地域的多様性を考える）, Nuansa,Jakarta:The Japan Foundation,August-September 2012,pp.4-5,査読無

〔学会発表〕（計12件）

①川口　明子、岩手県の学校と郷土芸能―平成26年度　郷土芸能教育実施アンケート調査を中心に、日本学校音楽教育実践学会東北支部例会、岩手大学（岩手県盛岡市）、2015年3月8日

②木村　直弘(企画・司会)、岩澤　孝子・小塩　さとみ（提言者）、音楽学（あるいは芸能研究）から震災（あるいは震災復興）へのアプローチ、日本教育大学協会全国音楽部門大学部会第39回全国大会・第6分科会「音楽学」、　札幌市教育文化会館（札幌市中央区）、2014年5月17日

③木村　直弘（コーディネーター）、橋本　裕之・中川真（報告者）、フォーラム　社会実験としての神楽宿、日本音楽学会東日本支部第21回定例研究会、岩手大学桐丘荘（岩手県盛岡市）、2014年3月22日

④見市　建、橋本裕之氏と「社会実験」としての民俗芸能復興支援―政策学からのアプローチ、民博共同研究：災害復興における在来知―無形文化の再生と記憶の継承、岩手県立大学（岩手県盛岡市）、2013年7月20日

⑤Miichi,Ken, Saving folk performing arts for the future: A challenge for Unotori Kagura after the Great East Japan Earthquake of 2011, International Conference on The Demography of

Disasters: Implications for Future Policy and Resilience, Australian National University (Australia), 20 Sep. 2013

⑥見市　建（シンポジウムの主催）、橋本　裕之（基調講演）、阿部未幸（研究発表） 他、シンポジウム：東日本大震災と岩手県沿岸の民俗芸能―地域を支えるチカラ、岩手県立大学総合政策学部防災復興研究会、岩手県立大学アイーナキャンパス（岩手県盛岡市）、2013 年 3 月 16 日

⑦Miichi,Ken, 講演 Peran Agama dan Budaya setelah Tsunami di Jepang（日本の津波後における宗教と文化の役割）,Linka (NPO),Banda Aceh(Indonesia),1 Mar.2013

⑧Miichi,Ken, Institutional Aspects of Folk Performing Arts in Coastal Iwate, workshop on Salvage and Salvation: Religion, Disaster and Reconstruction in Asia, Asia Research Institute, National University of Singapore(Singapore), 22 Nov. 2012

⑨中川　真（コーディネーター）、橋本　裕之・川口　明子（パネリスト）、プレセッション：震災後の民俗芸能の復興その後、東洋音楽学会第 63 回大会、国立音楽大学（東京）、2012 年 11 月 10 日

⑩見市　建、震災と地域社会―文化、宗教的視点から、新潟大学公開講座「震災とコミュニティ」（招待講演）、新潟大学（新潟県新潟市）、2012 年 11 月 03 日

〔図書〕（計４件）
①川口　明子（調査・執筆）、岩手県の小・中学校と郷土芸能―平成 26 年度　郷土芸能教育実施状況アンケート調査（第４次）報告書、岩手大学教育学部音楽科教育研究室、2015、40、CD-R 付き

②岩手県立大学総合政策学部（編集）、見市建・茅野恒秀　他、いわて地誌アーカイブ［１］岩泉・海・小本―東日本大震災を経て、ふるさとを見る・知る・探るビジュアル史料、イー・ピックス、2014、201（30,31）

③小島　毅（監修）、静永　健（編）、木村　直弘　他、シリーズ東アジア海域に漕ぎだす第６巻　海がはぐくむ日本文化、東京大学出版会、2014、255(217-231)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
①DVD 記録教材：鵜鳥神楽普代小学校子ども神楽宿 2013 年 1 月 23 日、撮影・制作：アサヒプロダクツ（代表　阿部武司）

６．研究組織
(1)研究代表者
川口　明子（KAWAGUCHI, Akiko）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：50466512

(2)研究分担者
木村　直弘（KIMURA, Naohiro）
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号： 40221923

見市　建（MIICHI, Ken）
岩手県立大学・総合政策学部・准教授
研究者番号： 40221923

(3)連携研究者
橋本　裕之（HASHIMOTO, Hiroyuki）
追手門学院大学・社会学部・教授
研究者番号：70208461

茅野　恒秀（CHINO, Tsunehide）
信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号： 70583540

(4)研究協力者
中川　真（NAKAGAWA, Shin）
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号：40135637

岩澤　孝子（IWASAWA, Takako）
北海道教育大学岩見沢校・
芸術・スポーツ文化学科・准教授
研究者番号：40583282